

イギリス教育小説における学校掃除婦の表象

——その文化的意味と政治的機能——

武田 ちあき 埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：学校掃除婦、学校小説、階級性、教育改革、地域主義

1. 序

村の小学校を舞台とする学校小説シリーズは、イギリス教育小説の系譜の中でもひととき国民の人気の高いジャンルである。

ミス・リード (Miss Read, 本名Dora Jessie Saint, 1913-2012) の「フェアエーカー村」もの20作 (“Fairacre” novels, 1955-96)、「スラッシュ・グリーン村」もの14作 (“Thrush Green” novels, 1959-2009) は、村の小学校の女性校長の見たバークシャー (Berkshire)¹⁾とコッツウォルズ (Cotswolds)²⁾の物語で、田園文学の古典としてロングセラーを誇り、うち15作は中村妙子による邦訳が出版されている。著者は1998年にMBE勲章を受勲し、王室からも文学的功績を認められている。

また、ヨークシャー (Yorkshire)³⁾の元・視学官、ジャーベイズ・フィン (Gervase Phinn, 1946-) の「デールズ」⁴⁾シリーズ13作 (*Dales series*, 1998-)、同じくヨークシャーの元・小学校長、ジャック・シェフィールド (Jack Sheffield, 1945-) の「先生」シリーズ10作 (*Teacher series*, 2004-) は、日本では知名度はほぼ皆無で、邦訳もないが、本国ではノンフィクションとしてもユーモア文学としても大好評を博し、ともにベストセラーで、現在も連作続行中である。

この3作家の物語にあふれる多くの登場人物は、奇人変人を尊ぶイギリス個人主義の国民性にたがわず、児童生徒はもちろん教職員も地域住民も、それぞれに個性の際立った「村の名物」揃い。驚きや笑いを誘う、珍しくも楽しい「人間見本市」の観すら醸す、この豊饒な多様さ・多彩さ・雑多さに、かれらの描く村社会の本質と教育の理想の一端が表現されているといっている⁵⁾。

しかしそうした中で唯一、際立って妙に画一的な像がある。それが「学校掃除婦 (school caretaker)」の人物像である。

上掲の3シリーズに登場する学校掃除婦は、ミス・リードの描くミセス・プリングル (Mrs Pringle) といい、フィンの描くコニー (Connie) といい、シェフィールドの描くルビー (Ruby) といい、みな一様に「強面 (こわもて) の女偉丈夫」なのだ。それぞれ独立しているはずの作品群のあいだで、この一点にのみ、なぜか生み出されている符合は、ある種の既視感を読者に触発してやまない。

この、不思議なまでに似通いすぎている造型が意味するものは、何なのか。このキャラクターの共通性には、どんな文化的・社会的背景が、また作者・読者のどんな思いが投影しているのか。さらには、国民のどんな命運が託されているのか。

本稿では、この3人の登場人物を、各連作の舞台となった時代、執筆された時代、受容される時代との関連から分析することにより、イギリス教育小説における学校掃除婦の表象が、第二次

世界大戦後からサッチャー政権の教育改革、さらには現在の欧州連合離脱に至るイギリスの政治情勢の中で、とりわけ教育界での伝統と改革の葛藤に関し、どのような文化的意味と政治的機能を担ってきたのかを明らかにしていきたい。

2. ミセス・プリングル——女ジョン・ブル

2-1 学校掃除婦の図像

「そこ、掃除したばかりなんですかね」（ミス・リード11）——これが、新校長ミス・リードを出迎えた学校掃除婦ミセス・プリングルの第一声だった。この宣戦布告以来、彼女は校長の好敵手ない天敵として、学校内に強烈な存在感を発揮し続ける。「フェアエーカー村」シリーズ全巻の随所に出没するにとどまらず、そのうちまるまる1巻が『ミセス・プリングル』(*Mrs Pringle*, 1989)、すなわち全編これ彼女の物語、として独立しているほどである。

このミセス・プリングルは、良きにつけ悪しきにつけ、学校掃除婦の元型（アーキタイプ）を成す。ずんぐり、がっしり、横方向にきわめて大柄な体格。むっつりと無愛想で、気難しい性格。妥協を許さぬ、完全主義の仕事ぶり。相手かまわず誰にでもぶつける、辛辣な物言い。

原著に添えられた人気画家ジョン・S・グッドール (John S. Goodall, 1908-96) の表紙画・挿画は、ミセス・プリングルの内面にこもる怒気、外に放つ近寄りがたいオーラ、そして残念な器量を、じつに雄弁に図像化している。

なにしろ素朴で柔らかい画風ゆえ、がにまたで歩くうしろ姿の挿絵はそれなりに可愛げがあって、作者ミス・リードの敬愛したA・A・ミルン (A. A. Milne, 1882-1956) の作中人物でいえば、くまのプーさんの体にイーヨーの性格が宿ってウサギ並みに働いている図、と好意的にいえなくもない。

しかし両手にバケツとモップを持って立ちほだかる正面の全身像は、まぎれもなく、武器を手にした女戦士にほかならない。その堂々たる迫力、重量感、安定感、学校という陣地を強硬に守り抜く兵士そのものである。

2-2 学校掃除婦の事情

働きぶりに一目置かれながらも気質を煙たがられる、このミセス・プリングルが、なぜ「変人」ではなく「典型」なのかを理解するには、まず、イギリスにおける学校掃除婦がどのような職業であるかを押さえておく必要がある。

教室・廊下など、学校の清掃が生徒指導の一環・教育活動の一部として、児童生徒によって行われる日本と異なり、英国ではこれはプロの仕事である。しかも、労働組合が日本のように職場ごとではなく、職種ごとに組織される英国では、業務の分担領域は互いに絶対不可侵である。

したがって、日本だったら担任の先生がみずから後始末に乗り出すような場面でも、英国では教員が手を出すわけにはいかず、掃除婦が来るまで汚物を手つかずにおかなくてはならない。逆に、掃除婦は自分以外に清掃をする人間がないため、自分がきれいにしたところを汚されるのを極度にいやがり、汚す相手を敵視することになる。(前節冒頭の台詞の起源はここにある。)

職名にもプロとしてのプライドが反映し、近年はcleanerではなくcaretakerが好まれる。日本の用務員と異なり、英国のcaretakerは実質的にはほぼ清掃員なので、業務内容からいえばcleanerでもいいはずだ (用務員としてはhandymanやgardenerなど、また別の職員がいる)。し

かし cleaner といえば、それは caretaker より格が下で、cleaner として雇用された者も assistant caretaker と呼ばれたがるほど。caretaker が「学校の staff の一員」というモダンな専門性を匂わせるのに対し、cleaner には前時代的な servant のニュアンスが強い。戦後まもない時代で、まだ cleaner と呼ばれている ミセス・プリングルの 仏頂面は、十分な評価や敬意を得られない不満ゆえともいえる。

そして職務内容は、とにかくきつい肉体労働。英国の村の小学校は、たいていが 19 世紀ヴィクトリア朝に建てられた旧式設備の校舎。戦後の、村の電力事情の乏しさや電化製品の配備の遅れ。サッチャー時代の教育予算緊縮による人員削減。加えて、イギリスの厳しい気候と天候不順。いつの時代、どの条件を見ても、英国の学校掃除婦は、この体格と根性でなければ務まらない重労働なのだ。機嫌が悪いと足を痛がって引きずる ミセス・プリングルの 芝居じみた動作も、不平の強調とはいえ、実際にからだにこたえる力仕事のつらさの証拠である。

また英国には「北部人は頑健で大柄」という共通認識がある（マクロン 18）。「プリングル」というスコットランド系の姓から連想されるのは、ハイランド・ゲームで丸太投げや砲丸投げに興じる力自慢の猛者たち、長い冬を耐え抜く屈強な農夫・牧夫たち。ミセス・プリングルの名前までが、「腕っ節も鼻っ柱も強い」学校掃除婦のステレオタイプを、さらに決定的にしている。

2-3 小学校長の事情

学校掃除婦の地位に関連して、もうひとつ押さえておくべきなのが、イギリスの村の小学校長のバックグラウンドである。

日本では校長といえば管理職の頂点、功成り名遂げた 50 代というイメージがあるが、英国の村の小学校では、校長職はいわばキャリア官僚のようなもので、大学で教員養成課程を修了し、ある程度の現場経験を積んだ若手が、教育委員会の公募に応じ、書類選考と面接を経て抜擢され、往々にして地域の外から落下傘的に赴任する。着任時は 30 代が普通。なにしろ学校運営だけでなく普通に授業も担当し、複式学級を担任するので、若さとエネルギーも必要なのだ。

これはすなわち、校長と掃除婦では出身階級が違う（校長は大卒の中産階級、掃除婦は労働者階級）のに加えて、年齢層も地位の上下と逆転している（校長は新米の青二才、掃除婦は古参のベテラン）場合が多い、ということの意味する⁶⁾。

また中産階級がかつては「たとえひとりだけでも家事使用人を雇っている家庭」と定義されていたイギリスにおいて、校長職を務めるほどの高学歴女性に家事能力を期待することは、そもそもおかど違いであった。

よって女校長 ミス・リードは、社会進出する戦後女性のタイプを体現しているだけに、大学時代の親友にも太鼓判を押されるほどの家事下手。片づけも掃除も苦手で散らかった校長宿舎は、その清掃も担当する ミセス・プリングルにすれば、女としての基本的な能力の欠けた結果で、軽蔑の対象ですらある。まがりなりにも結婚している ミセス・プリングルから見たら、ろくに家事もせず家庭も持たずに独身を通す ミス・リードの生き方は、理解の域を超えている。

このように乗り越えがたい階級差と価値観の相違を強烈に意識しながらも、決して校長に媚を売ることはせず、堂々と対立する「地の塩」、それが学校掃除婦の真骨頂である。イギリスの階級社会で最も侮蔑されるのが、上の階級にへつらい、下の階級を見下す「俗物 (snob)」であることを思えば、この学校掃除婦の居丈高な態度は、じつは最も俗物から遠い、ひとつのあっぱれな模範とすらいえる。

ミセス・プリングルの無礼・無神経にも思えるふるまいは、何があろうとブレも揺るぎもしない、一種の真率な美德であり、英国の伝統的な村社会を基盤から支えてきた労働者階級の矜持であることが見えてくる。

2-4 旧体制への忠誠

校長に対して礼儀のない、一見、階級を無視した共和主義者かと思われそうなミセス・プリングルが、かつての奉公先の女主人の死に接し、涙をこぼす。その意外な姿が、単行本『ミセス・プリングル』の読みどころである。

娘時代にメイドをしていた上流のお屋敷で受けた恩を決して忘れないミセス・プリングルは、階級社会の転覆者どころか、その護衛兵ですらある。その戦いは、彼女から見て「無意味に」新しいものへの抵抗であり、旧来の秩序への忠誠なのだ。

対戦相手のミス・リードにとって、新校長としての闘いの至上目的は、地域に根差した教育を行うこと、つまり、この村になじみ、その古い社会に溶けこむこと。それを遂行する上で最大の難題が、村の学校の最前線に陣取るミセス・プリングルと折り合うことだったのだ。

ミセス・プリングルは変わらない。多少軟化する瞬間は垣間見せても、校長に歩み寄ったりすることはなく、いっそ潔く、我を貫く。『ミセス・プリングル』の幕切れの台詞は、幕開けと同じ、「そこ、掃除したばかりなんですがね」(239)。校長は、この不動の女傑をそのまま尊重することに自分の着地点を見出し、それによって地域に根付くという使命を完了する。

この不機嫌な掃除婦は、村落社会の砦にして、不変の伝統的英国国民の象徴。さんざん文句をたれながらも、地に足のついた仕事を守り抜く、恰幅のいい体型の、まさに女ジョン・ブル⁷⁾。

それは第二次世界大戦を勝ち抜いた英国の不屈のブルドッグ魂の具現であり、戦後の社会不安において人々を励ます参照点、のちには英国病の怠惰な国民を叱咤する手本、サッチャーの教育改革では新政策に抗する保守派の旗印。ミセス・プリングルの威容は、それぞれの時代の読者に対し、一貫して英国性の権化としての機能を保っているのである。

3. コニー——気難しいブリタニア

3-1 学校掃除婦／学校掃除夫の布置

フィンの作品における学校掃除婦は、サッチャー政権下の1980年代を舞台にしているだけに、この時代の教育政策や社会風潮⁸⁾に対して、より具体的なメッセージを発する存在となっている。しかも、多数の作品にわたって複数の学校掃除婦／学校掃除夫が登場し、おたがいに反響し合うことで、重層的で立体的なイメージが浮かぶ構成になっている。

そこで、まずはフィンの作品群を整理しておく必要がある。序章でざっくり「デールズ」シリーズと総括した作品群は、じつは3つの小説シリーズに細分化される。

ひとつめのシリーズ、すなわち狭義の「デールズ」シリーズは、州の視学官フィン自身を主人公にした『谷の裏側』(*The Other Side of the Dale*, 1998)、『丘を越え谷を越え』(*Over Hill and Dale*, 2000)、『谷でてんやわんや』(*Head Over Heels in the Dales*, 2002)、『谷でうろうろ』(*Up and Down in the Dales*, 2004)、『谷の奥』(*The Heart of the Dales*, 2007)の「デールズ5部作」。

ふたつめのシリーズは、同じくデールズ地方を舞台に、女性小学校長を主人公とした『小さな

村の学校』(*The Little Village School*, 2011)、『小さな村の学校、困る』(*Trouble at the Little Village School*, 2012)、『視学官訪問!』(*The School Inspector Calls!*, 2013)、『愛の教え』(*A Lesson in Love*, 2015)、『小さな村の学校の秘密』(*Secrets at the Little Village School*, 2016)の5冊からなる「小さな村の学校」シリーズ (*Little Village School series*)。

3つめのシリーズは、ふたつめのシリーズのスピノフとして始まったばかりの新シリーズで、第1作は『谷のてっぺんの学校』(*The School at the Top of the Dale*, 2018)。ふたつめのシリーズでプロ・サッカー選手から教員への転身を目指して教育実習をしていた若者が、本シリーズでは主人公となり、いよいよ初任者としてデールズ地方の中でも最僻地の小学校に赴任する。とりあえずは「谷のてっぺん」もの (*Top of the Dale novels*) と銘打たれているシリーズである。

これらに自伝『谷への道』(*Road to the Dales*, 2010)、回想録『森は出たけど丘は越えず』(*Out of the Woods But Not Over the Hill*, 2010)の2冊を加えたのが、広義の「デールズ」シリーズであり、これは「デールズ・クロニクル (デールズ年代記)」とも総称できよう。

前章のミセス・プリングルの最も正統な末裔に当たるのが、第1シリーズに君臨するコニー。その変異型が、第3シリーズを賑やかすミセス・ゴスリング (Mrs Gosling)。この精励な働き手たる学校掃除婦たちと対照をなすのが、第2シリーズのミスター・グリボン (Mr Gribbon) と第3シリーズのミスター・レッドビーター (Mr Leadbeater) ら、「ゆるい」学校掃除夫たちである。

3-2 戦う学校掃除婦

コニーは、その登場からして、明らかにミセス・プリングルの再来である。初対面のフィンに浴びせた怒声が、「ちょっと! その床、拭いたばかりなんだけど!」(Phinn, *OSD* 73) この時、フィンは州の視学官に登用されたばかり。コニーは州の教育委員会が運営する教員研修センター専属の掃除婦。どんなエリートだろうと容赦しない舌鋒は、一言一句、生き写しである。

教員研修センターとは、各教科の最先端の教育内容や教育方法を、ワークショップやレクチャーで現場の教員に伝授する機関である。視学官は州内の各学校を回って現場で指導するだけでなく、ここでの講習の講師も務める。日本なら教育研究所の主任指導主事といったところ。これはつまりコニーから見れば、視学官というリーダー的教員はみな、新しい教育を鼓吹する伝統の敵、ということになる。

なかでも、コニーが最も目のかたきにしているのが、美術教育担当のシドニー (Sidney) である。視学官として優秀で、芸術教育に自由奔放な創造性と独創性を発揮する稀有の人材だが、コニーにとっては、建物を一番汚す厄介者。前衛芸術も、彼女にはただのゴミ。そして実際、展示作品を、シドニーに断りもなくゴミ箱にぶちこむ。

「地獄から来た掃除婦!」(73) とシドニーがわめく通り、コニーは新式だろうが新案だろうが、胡散臭いものは一切合財まとめて地獄送りにする始末人、ターミネーターなのだ。「はたきを陸軍元帥の司令杖さながらに構えた」(174) お決まりのポーズは、軍人のイメージとしてはミセス・プリングルより何階級も昇進している。もっと教育行政の中核に近い要衝で、さらに格上の敵と渡り合うコニーの雄姿は、ミセス・プリングルより、はるかにパワーアップしている。

階級や社会的地位を意に介さない点も、コニーはさらに極端である。だれもがDr Goreとかsirとしか呼ばない教育長までを、Brianとファースト・ネームで気安く呼ぶ。教育科学大臣が視察に訪れた時にも、案内して回る教育長にいつもの調子で「上着を預かろうか、ブライアン」、「お茶を出そうか、ブライアン」、「足元に気をつけて、ブライアン」(177) と連発。さすがの教育長も

青くなる一方、じつは同音の名前だった大臣の Sir Bryan は、帰り際に親しみをこめてにっこりと「じゃあね、コニー」(179)と声をかけるのだ。

中産階級には嫌悪を示すのに上流階級には従順、というパターンもミセス・プリングル譲りである。サッチャー内閣の教育科学相といえば教育改革の手先として憎まれ役になって当然なのに、ここでは「チャーミングな紳士」として扱われ、本来ならありえないはずの友好関係が結ばれる。そこには「悪いのは成り上がりの女首相。大臣は振り回されているだけ」とでも言わんばかりの、旧体制への愛着がにじみ出ている。

コニーが早期退職をする際、教育長の推薦でなんとMBE勲章を授与されることになるのは、学校掃除婦がお国のために働いたことを政府が公式に認めた証である。ダウニング街10番地から届いた通知に、女王陛下への拝謁を思い、卒倒しそうになるコニーだが、このエピソードは、学校掃除婦のアイコンが国家の榮譽のシステムに組み入れられて、国を守る女神ブリタニアにまで接近していることを示す。ミセス・プリングルが始めた戦いは、コニーにおいて国家規模に拡大し、ひとつの頂点を極めるに至るのである。

3-3 サボる学校掃除夫

「仕事に手を抜かない、手ごわい学校掃除婦」という類型は、フィンの第3シリーズに登場するミセス・ゴスリングにも繰り返される。もとは村の領主の館で家政婦をしていたが、女主人にネックレス盗難の嫌疑をかけられて逆上し、辞職して学校掃除婦に転職。その後、冤罪は晴れるが、元の職場には戻らない。品格ある貴族の旦那様を敬愛し、一方で、成り上がりの尊大な奥方を心底軽蔑している、というのも、コニーやミセス・プリングルと同じ構図である。

こうした有能で勤勉な学校掃除婦たちと明らかな対照をなすのが、フィン作品に出てくる無能で怠惰な学校掃除夫たちである。

第2シリーズのミスター・グリボンは、なにかといえれば体調不良を訴え、暇さえあれば事務員のミセス・スクリムショー (Mrs Scrimshaw) のところへ行って、鍵束をジャラジャラ鳴らしながら無駄話をして油を売る怠け者。第3シリーズのミスター・レッドビーターは、遅刻の常習犯で、やることなすこと気がきかず、酒場で領主のどら息子にどやされても言い返せない小心者。

ふたりはともに、仕事にやる気がなく、最低限の仕事しかせず、可能な限りサボることを旨としている——これはすなわち、まぎれもなく典型的な英国病の症例である。

同じ学校掃除人でも、女性たちが模範的な働きぶりで国家を牽引する象徴性を帯びているのに対し、男性たちはだらしなく手を抜いて国家の足をひっぱる、等身大のリアルな労働者なのだ。

この設定の強烈な対比に、男性作家としてのフィンの自虐や皮肉を感じ取ることも可能だが、物語の進行は、これが単純にたがいを引き立てるためだけのものではない、と読者に気づかせる。

ミスター・グリボンは、新任の女性校長エリザベス (Elisabeth) のおだてに乗って、寄木細工の床を磨きたてることに誇りを持つようになる。ミスター・レッドビーターは、彼の名誉のために彼に代わって新人教員トム (Tom) が領主の放蕩息子を殴り倒したことから、その件を村人たちからかわれたりすることもあって、少しずつ考え方を変えつつある。

つまりふたりは、停滞していた日常から徐々に脱し、成長していく人物、未来がある人物として、そこに据えられているのだ。これもまた、作者フィンの、希望に満ちたメッセージとして受け取れる。

フィンの第2シリーズと第3シリーズはともに、サッチャー時代の学校統廃合のドラマをひとつ

の大きなテーマとしている。効率重視・経費節減の波に真っ向から武器（掃除用具）を取って立ち向かう学校掃除婦のりりしい姿に劣らず、それまで浸かっていたぬるま湯をふと見直す気になる学校掃除夫の心のさざ波は、現状維持をよとする保守的な村社会の人々に、地域社会を守るためには行動が必要だと、強い説得力を持つ要素なのだ。

女性の活躍と地域の再興、フェミニズムと保守反動がいずれも不思議に両立するフィンの世界は、21世紀のいま書かれ、いま読まれている。それは、EU離脱に向かって国民のアイデンティティーが問われる現在、グローバリズムと地域主義が拮抗する今の時代にこそ、国民がこの物語を、ひとつのおとぎ話として、あるいは神話として、必要としているということだ。

フィン作品は、過去の回顧に終わらない、いま世に訴える政治的なプロパガンダでもある。その中心に鎮座するひとつの強力な旗印が、勇猛なブリタニアとしての学校掃除婦なのであった。

4. ルビー——気のいいブリタニア

4-1 国母としての学校掃除婦

フィンと同じ時代・同じ地域に展開するシェフィールドの「先生」シリーズは、また構成を異にする。

これは、校長の義務として毎日記載する「学校日誌」の公的な記述の裏に、実際にはどんなドラマがあったのかを私的につづる「裏・学校日誌」であり、1年度につき1冊のペースで刊行される。校長に就任した1977年度の物語、『先生、先生!』(*Teacher, Teacher!*, 2004)以降、『先生様』(*Mister Teacher*, 2008)、『親愛なる先生』(*Dear Teacher*, 2009)、『村の先生』(*Village Teacher*, 2010)、『はい、先生!』(*Please Sir!*, 2011)、『ジャックに教育』(*Educating Jack*, 2012)、『授業終了!』(*School's Out!*, 2013)、『聖夜』(*Silent Night*, 2013)、『先生の星』(*Star Teacher*, 2015)、『幸せ極まる日々』(*Happiest Days*, 2017)と、現在は10作目、1986年度の話までが出ている。

一定の速度で進行するこの連作は、毎年の学校や村のエピソードはもちろん、当時の流行・話題・事件がふんだんに盛り込まれ、イギリスの国民史・社会史の縮図となっている。

その中で、学校掃除婦ルビーは「国の母」ともいべき意匠で描かれる。

まず、そのスミス (Smith) という姓は、イギリスで最も多い名字⁹⁾で、いわば国民の代表。アンディ (Andy)、ラクウェル (Racquel)、ダギー (Duggie)、シャロン (Sharon)、ナターシャ (Natasha)、ヘーゼル (Hazel) と、6人の子沢山は「ヨーロッパの母」と呼ばれたヴィクトリア女王を思わせる。陸軍に入隊した長男アンディはフォークランド紛争 (Falklands Conflict, 1982) で出征し、ひたすら無事を祈るこの銃後の母は、戦時の村の、人心の核となる。

体重20ストーン (127キロ)、作業服のサイズは最大のXXXL¹⁰⁾。エレガントな事務長ヴェラ (Vera) の前に立つ姿は「細い麦穂」の前の「巨大な赤いコンバイン」 (Sheffield, *TT* 30)。大型農業機械並みの体格は学校掃除婦の類型そのものだが、性格としては母性がひときわ強調されている。

ミセス・プリングルも姪には甘く、コニーも孫には目がない人情家の一面を見せていたが、ルビーの母としての奮闘ぶりは群を抜く。それは彼女が、前二者とは比べものにならないくらい、生活に困窮しているという状況からきているのである。

4-2 だめんずとしての学校掃除婦

ルビーの夫ロニー (Ronnie) は一応、賭けレース用の鳩の飼育家で、村のサッカー・チームのマネージャーではあるが、パブに入りびたりの呑んだくれ。サッカーでは八百長、運動会の競走ではフライングをやらかすイカサマ屋。働く気など毛頭なく、村の誰もが認める「役立たず」。これはすなわち、サッチャー政権下の典型的な失業者なのだ。

ルビーは6人の子と夫と鳩たちを養っていくため、ひたすら働く。その名の「紅玉」とは、重労働に携わる彼女の、いつも紅潮した頬と、荒れた手のあかぎれの色。重量級の巨体も、近くのラウントリー (Rowntree, 英国を代表する菓子メーカー、本社ヨーク) のチョコレート工場に働きに出た長女ラクウェルが毎週持ち帰る徳用袋を、長年ストレス食いし続けた結果。

ベビーシッターをする三女ナターシャ、葬儀屋に勤める次男ダギー。「揺りかごから墓場まで」という福祉国家時代の英国の社会保障制度のキャッチフレーズさながらに、子どもたちは働いて家にお金を入れるが、ロニーの失業手当はビールとタバコに消える。

そのような夫の妻に甘んじるルビーは、お人よし、あるいは、いわゆる「だめんず」とも解せるが、当時の失業者数の規模¹¹⁾を考えると、むしろこれが労働者階級の妻の多数派だったろう。

つまりルビーは、英国病患者を見捨てないブリタニア。サッチャー政権による国有企業民営化・規制緩和・構造改革・炭鉱閉鎖のあおりを食った失業者たちの面倒をあくまで見続け、その経済政策にへこたれることのない、強き「だめんず」として赤く輝いているのである。

4-3 アイドルとしての学校掃除婦

作者シェフィールドは、ルビーを従来の学校掃除婦の枠に入れながらも相当に美化・理想化しており、ルビーはほとんどヒロインとっていい座を獲得している。夫に苦勞させられるルビーを「村の人気者」として描く筆致には、彼女の受難への同情と、彼女の健闘への応援がこめられているのだ。

ルビーがミセス・プリングルやコニーと特に違っているのは、その陽気で健気な働きぶり。もはや学校のBGMといえるほど、いつも機嫌よく歌っている『サウンド・オブ・ミュージック』(*The Sound of Music*, 1965) の挿入歌の数々は、英国労働者階級に絶大な人気を誇る映画だけに、周囲の共感を呼ぶ¹²⁾。これらの曲を勤務中あまりにも歌いこんだ結果、村ののど自慢で思わず優勝してしまい、村人のさらなる喝采を浴びて、歌手としてのスター性すら帯びることとなる¹³⁾。

学歴のないルビーはメモ書きの綴りも間違いだらけで笑えるが、よくしでかす言い間違いは、難しい言葉を別の似た言葉と入れ替えて結果的に滑稽な意味になる、英国伝来のマラプロピズム (malapropism, R・B・シェリダン (R. B. Sheridan) の喜劇『恋敵』(*The Rivals*, 1775) の登場人物マラプロップ夫人 (Mrs Malaprop) お得意の誤用) で、これが毎回、校長には大受け。女お笑い芸人、コメディエンヌとしても出色。

容色についても、じつは、若い頃は村の「五月祭の女王 (メイ・クイーン)」に選ばれたほどのスリムな美女。娘たちはみな母譲りの美人で、妖艶な次女シャロンはポップ・グループ、デュラン・デュラン (Duran Duran) のメンバーかと思うほどハンサムな牛乳配達人を婚約者に射止める。

不摂生がたたり夫ロニーが心臓発作で急逝すると、旧友ジョージ (George) が求婚。ジョージは初恋がルビーだったが、ロニーとの結婚で夢破れ、傷心から故郷をあとにしてスペインに渡り、フィッシュ・アンド・チップスの事業で大成功を取め、のち引退して帰郷してきたところだった。亡夫を追慕して即答しなかったルビーも、ジョージの誠実さや子どもたちの勧めから再婚を決意

——このラブロマンスでは、ルビーはもはやプリンセス。

裕福なジョージの妻になり、もう生活のために働く必要はなくなっても、学校と子どもたちを愛するがゆえに学校掃除婦を続けるルビーは、ライフスタイルを変えないシンデレラですらある。

もともとヨークシャーから一步も出たことがないルビーは、ハネムーンでスペインへ、というジョージの提案に怖気づき、ヨークシャーの海辺の保養地ホイットビー (Whitby) なら、と承諾。ふたりは結局ロンドンまで足を伸ばす。この選択にも、地域主義・愛国主義のアイドルとしてのルビーの立ち位置がよく出ている。

ほとんど「学校掃除婦」離れしてロマンティックすぎる設定では、という違和感が生じてもおかしくないところだが、思えば前夫ロニーも、怠け者ではあっても、浮気夫でも、暴力夫でも、薬物中毒でも、犯罪者でもなかった。もっとひどい夫、もっと悲惨な事例は、いくらでもありえたと、労働者階級の現実はとてもこんなものではすまなかったはずだが、それがこの程度でおさめられているということは、作者の意図が写実的なルポではなく、象徴的な寓話の構築にあった、ということだ。

架空の村ラグリー・オン・ザ・フォーレスト (Ragley-on-the-Forest) に繰り広げられる世界は、牧歌的なファンタジーで、夢の空間。ここに描かれているのは夢の学校であり、夢の学校掃除婦。この包容力豊かなルビーは、気のいいブリタニアであり、現代の、疲れ、迷い、悩む英国国民に、郷愁と癒しと励ましを与え、次代へと進む英気を養わせてくれる神話の女神なのだ。

1980年代の英国において実際に各紙誌で軍神ブリタニアに模されていたのが「鉄の女」サッチャーであった (飯田230-232) ことに照らすとき、この現実と夢の、30年をはさんだ対比から、首都の首相よりも地方の学校掃除婦こそが国民を率いるという、現代の「草の根」の地域主義の、(作品の軽快な印象からは思いもかけないほど) 野太く逞しい政治的願望が浮かんでくる¹⁴⁾。

その願望は現実には具体的な形をとっており、シェフイールドの「先生」シリーズが刊行されてきたこの十数年は、舞台であるヨークシャーの地方独立運動が勃興し発展してきた時期と重なる。スコットランド独立を問う住民投票が実施された2014年には、「ヨークシャー・ファースト (Yorkshire First)」キャンペーンが開始され、翌年には、この名を冠した政党が正式発足する。州の面積としてはイングランド最大、人口ではスコットランドと同数、経済規模ではウェールズの倍もある地域として相応の権限を持つべく、ヨークシャー独立議会の設置をはじめとする諸政策が目標として掲げられ、実現に向けて活動が続けられている¹⁵⁾。

「英国 (UK) vs. 欧州 (EU)」、「地方 (country) vs. 中央 (Westminster)」、「州 (county) vs. 国家 (nation)」と、さまざまな図式において掲げられる地域主義であるが、その「地域」を最も狭く規定しているはずの3つめの図式で、最も先鋭でラディカルな戦いが、いま繰り広げられているのだ。

ルビーの赤とは、炭鉱の地ヨークシャーの石炭の燃える色でもあった。現実には時の政権によって消されたとしても、物語の象徴空間では赤く燃え続ける、このルビーの物語は、ここヨークシャーにおいては、この地域の誇り、地域への愛を鼓舞する熾火として確実に機能しているのである。

5. 結

イギリス教育小説における学校掃除婦はジョン・ブルの女性版、ブリタニアの労働者階級版として、英国の伝統的な社会と教育現場を時の政策や風潮に抗して守り抜く、保守主義と地域主義

のトレードマークであり、彼女たちは作品の中で、学校を清掃 (sweep) するとともに席捲 (sweep) する存在となっている。

歴史と伝統の刻印としての、その象徴性は、第一次世界大戦の最後の生存者で、111歳で世を去った「最後の英国兵 (The Last Tommy)」ことハリー・パッチ (Harry Patch, 1898-2009)¹⁶⁾と並んで、まさに今の国民に必要とされる国家的偶像なのだ。

ミス・リード、フィン、シェフィールドの3人で20世紀全般をカバーする、村の学校の生活誌は、国歌を筆頭に、おびただしい愛国歌・愛国詩によって構成される英国讃歌のジャンル¹⁷⁾の一翼を進んで担うものである。

ホミ・K・バーバ (Homi K. Bhabha) のいうように「語ること (narration) が国家 (nation) を作る」、そして「国家 (nation) とは語り (narrative) である」(Bhabha 1) としたら、この3人の作家は語ることによって、かつての村と学校を再構成し復元し、過ぎし日の共同体や教職員間の連帯感を再現し再興し、失われかけた英国性の輪郭と内実を補強し補填して、未来の国民に託せる遺産としての国家像を作っているといえる。

学校という「未来の世代を育てる場」、「未来を作る場」を掃き清め、拭き上げ、手入れし続けるイギリスの学校掃除婦とは、脇役どころか、国家の使命を体現するキー・パーソンだったのである。

注

- 1) バークシャーはイングランド南東部に位置し、英国で最も古い州のひとつ。名誉革命におけるレディングの戦い (1688) など英国史の舞台になってきた由緒ある地方で、ウィンザー城を擁する。この地方原産の豚も有名。
- 2) コッツウォルズはイングランド中央部の丘陵地帯で、数州にまたがる。「イングランドの中心」と呼ばれ、英国人の理想の「田舎 (countryside)」像の代表。はちみつ色の石の建物やコテージ・ガーデンでも名高い観光地。
- 3) ヨークシャーはイングランド北東部の州で、「神のお膝元 (God's Own Country)」と呼ばれ、その豊かな自然は英国人の心の古里といえる地方だが、歴史的には幾度にもわたって行政区分が変更され、中央政府の都合に振り回されてきた。1974年以前は北・東・西の3つのライディング (riding)、1974年からは北ヨークシャー・西ヨークシャー・南ヨークシャー・ハンバーサイドの4つの州 (county) に分割され、1990年代以降はヨークシャー・アンド・ザ・ハンバーという1つの地域 (region) として称されているが、区域が変わるたびに境界付近の町村は他州をまたいだ変更を余儀なくされるなど、さまざまな不具合と不満が生まれてきた。1980年代には、炭鉱閉鎖と労働組合弱体化をめざすサッチャー首相と対立して、炭鉱労働者のストライキが起り、ヨークシャーは激しい争議の地となった。
- 4) ヨークシャーのデールズ地方 (渓谷地方) は、ヨークシャー・デールズ国立公園に指定された、英国でも有数の風光明媚な地域で、牧歌的な丘陵とダイナミックな景観を併せ持つ。観光地ながら辺鄙な田舎で、住民の朴訥さ、子どもたちの素朴さ、不便な地での視学官の苦労が、フィンの筆でほほえましく作品化されている。
- 5) 村人の個性の詳細とその総合的な意義については、武田 (2018) を参照のこと。
- 6) ミス・リード作品の時代設定では、校長は、小学校卒業後そのまま学校に残って助教となった教員たちとも、出身階級が違っていた。そうしたベテラン助教の物語が、「フェアエーカー村」ものでは『ドリー先生の歳月』(Miss Clare Remembers, 1962) と『エミリー先生』(Emily Davis, 1971)。
- 7) ジョン・ブルが英国国民の不満を代弁する人物として登場し、継承されてきた歴史的経緯については、飯田 (2005) を参照のこと。
- 8) サッチャーの教育改革の概要は次の3点に整理できる。ひとつめは財政再建のための教育関連予算削

減で、とりわけ学校給食における牛乳無償配給の廃止決定は「牛乳泥棒 (Margaret Thatcher, Milk Snatcher)」、「ぶんどり屋サッチャー (Thatcher the Snatcher)」の汚名を生んだ。ふたつめは、国際競争力としての学力向上を目標とする全国共通カリキュラム (日本の学習指導要領にあたる) と全国一斉学力テストの導入で、この教育内容の画一化と成果主義は、従来の英国の個人主義と経験主義に基づいて各学校・各教員の自由裁量と独自性を尊重した伝統的教育方式と、真っ向から対立した。3つめは教育行政の中央集権化を目的としたオプト・アウト (離脱) 制度で、これは学校理事会が地方教育委員会から離脱して政府の直轄となることを認めたものであり、地方教育当局の権限縮小によって地方の社会的・政治的意向が学校現場に反映しにくくなる (特に、教育界で強かった労働党の影響力の排除を狙った) ものだった。この一連の教育政策には、サッチャー率いる保守党の議員の間にも「政府はひとつの世代の教育をめちゃめちゃにしまっている」(山口129) との声が出たほど。サッチャーの前のキャラハン元首相は労働党内閣を率いた立場から、もちろんこれに反対して「教育における伝統的な価値観への回帰」(Vinen 79) を訴えたが、サッチャー自身も入閣前は中等教育のあり方について、グラマー・スクールとコンプリヘンシブ・スクールの間で煮え切らない態度をとっていた (Vinen 32) くらいで、世論を二分するのも無理もない国家的難題ではあった。

- 9) Smithは2008年の国勢調査でも英国一多い姓であり、この100年間、トップの座を守ってきた (*The Japan Times* 27 March 2009)。John SmithといえばEnglish common peopleの代表である (中島104)。ルビーの姓の含意は、こうした統計上の事実と社会通念の両方から来ている。
- 10) この設定は日本の読者には「あまりにも大げさで非現実的な戯画化」と思われかねないが、じつは英国は、欧州一の肥満大国。2014年の世界保健機関 (WHO) の統計によると、イギリスの成人人口の2/3以上が過体重 (overweight, BMI値25以上) ないし肥満 (obese, BMI値30以上) である (*Wikipedia*)。妊娠判明時点で100キロ超の妊婦が半数以上を占めるイギリスでは、女性の服の平均サイズはXL (ウィルトモ93-95)。よってルビーは、これでも「かろうじて大柄」な程度なのであり、過度の誇張とはまったく言えない。なお、政府は肥満対策の一環として、砂糖含有量が100ミリリットルあたり5グラムを超える飲料に課税する「砂糖税 (Sugar Tax)」の導入を2016年に決定し、2018年4月より施行している (*Wikipedia*)。また、10~11歳児の過体重率・肥満率が計40%のヨーロッパ最高レベルに達するロンドンでは、サディク・カーン (Sadiq Kahn) 市長が、地下鉄・バスなど市の公共交通機関におけるファストフードの広告禁止を検討中であることを、2018年5月に表明している (*The Japan Times* 19 May 2018)。
- 11) 1979年時点でイギリスの失業者数は200万人に上っていたことが、作中でも言及されている (Sheffield, *DT* 56)。
- 12) 映画『サウンド・オブ・ミュージック』の可愛らしさと甘ったるさがイギリス人のセンチメンタリズムに訴えて国民的人気を博してきた現象の分析については、新井 (2008) を参照のこと。
- 13) 優勝の瞬間、観客席の後方に陣取っていた村のサッカー・チーム一同が立ち上がって唱和したシュプレヒコールの“Ruby for England! (ルビー、イギリスー! / イングランド代表ルビー!)” (Sheffield, *MT* 48) というフレーズは、国を代表する軍神ブリタニアとしてのルビーの位置をも示唆している。
- 14) いまこそ太り果てたとはいえ、ルビーがかつて村のメイ・クイーン (五月祭の女王) であったことは、村のフォークロア (民俗文化) の継承者としても、また五月祭のパレードやモリス・ダンスの行われるメーデー (MayDay) が「労働者の日」となっている現代においては労働者階級の牽引役としても、象徴に富む。むしろ、肉も齢も重ねてなお、元メイ・クイーンの人気が衰えないことにこそ、社会情勢の激変に耐え抜き踏みとどまる、地域社会におけるその存在意義の強固さが示されている、ともいえる。ヨークシャーにおいて民衆を率いる自由の女神として、ブリタニアに並んで、ふさわしいイメージでもある。
- 15) 政党としての「ヨークシャー・ファースト」は2016年に「ヨークシャー党 (Yorkshire Party)」と改称し、支持層と勢力の拡大を図りつつ、活動を続けている。ヨークシャー独立運動と同時期に世界各地で起こった、地方への権限移譲を求める動きについては、武田 (2018) を参照のこと。
- 16) ハリー・パッチの自伝 (2008) は、共著者の歴史家リチャード・ヴァン・エムデンの編集を経て、個

人の歴史を超え、国家の物語としての象徴性を帯びている。パッチの110歳の誕生日には桂冠詩人アンドリュー・モーション (Andrew Motion) が慶賀の詩を捧げ、翌年の死にはロックバンドのレディオヘッド (Radiohead) が追悼曲を捧げており、これらは一種の国家的祝祭および国葬といえる文化現象だった。この「最後の英国兵」の神話化に関する分析については、霜鳥 (2013a, 2013b) を参照のこと。

- 17) シェイクスピアやキーツなどの古典も含めた、この種の作品のアンソロジー化は、英国とEUの関係悪化に伴い、近年いっそう盛んになっている。その例については、Hunter (2014) を参照のこと。

参考文献

- Bhaba, Homi K. "Introduction: Narrating the Nation." *Nation and Narration*. Ed. Homi K. Bhabha. London: Routledge, 1990. 1-7.
- Hunter, Jane McMorland, ed. *Favourite Poems of England*. London: Batsford, 2014.
- Miss Read. *Miss Clare Remembers*. London: Michael Joseph, 1962.
- . *Emily Davis*. London: Michael Joseph, 1971.
- . *Mrs Pringle*. London: Michael Joseph, 1989.
- Patch, Harry with Richard van Emden. *The Last Fighting Tommy: The Life of Harry Patch, the Oldest Surviving Veteran of the Trenches*. 2007. London: Bloomsbury, 2008.
- Phinn, Gervase. *The Other Side of the Dale*. London: Michael Joseph, 1998; London: Penguin, 2010.
- . *Over Hill and Dale*. London: Michael Joseph, 2000; London: Penguin, 2010.
- . *Head Over Heels in the Dales*. London: Michael Joseph, 2002; London: Penguin, 2010.
- . *Up and Down in the Dales*. London: Michael Joseph, 2004; London: Penguin, 2010.
- . *The Heart of the Dales*. London: Michael Joseph, 2007; London: Penguin, 2010.
- . *Road to the Dales: The Story of a Yorkshire Lad*. London: Michael Joseph, 2010; London: Penguin, 2011.
- . *Out of the Woods But Not Over the Hill*. London: Hodder & Stoughton, 2010.
- . *The Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2011.
- . *Trouble at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2012.
- . *The School Inspector Calls!* London: Hodder & Stoughton, 2013.
- . *A Lesson in Love*. London: Hodder & Stoughton, 2015.
- . *Secrets at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2016.
- . *The School at the Top of the Dale*. London: Hodder & Stoughton, 2018.
- Sheffield, Jack. *Teacher, Teacher!: The Alternative School Logbook 1977-78*. London: Central Publishing Services, 2004; London: Corgi, 2007.
- . *Mister Teacher: The Alternative School Logbook 1978-79*. London: Corgi, 2008.
- . *Dear Teacher: The Alternative School Logbook 1979-80*. London: Bantam, 2009.
- . *Village Teacher: The Alternative School Logbook 1980-81*. London: Bantam, 2010.
- . *Please Sir!: The Alternative School Logbook 1981-82*. London: Bantam, 2011.
- . *Educating Jack: The Alternative School Logbook 1982-83*. London: Bantam, 2012.
- . *School's Out!: The Alternative School Logbook 1983-84*. London: Bantam, 2013.
- . *Silent Night: The Alternative School Logbook 1984-85*. London: Bantam, 2013.
- . *Star Teacher: The Alternative School Logbook 1985-86*. London: Bantam, 2015.
- . *Happiest Days: The Alternative School Logbook 1986-87*. London: Corgi, 2017.
- Vinen, Richard. *Thatcher's Britain: The Politics and Social Upheaval of the Thatcher Era*. London:

Simon & Schuster UK, 2009; London: Pocket Books, 2010.

- 新井潤美。『へそまがりの大英帝国』。平凡社新書。東京：平凡社、2008。
- 飯田操。『イギリスの表象——ブリタニアとジョン・ブルを中心として』。京都：ミネルヴァ書房、2005。
- ウィルトモ。『肥満大国』。『イギリス毒舌日記』。東京：ワニブックス、2016。93-95。
- 霜鳥慶邦。「最後のトミー、すべてのトミー——Harry Patch, *The Last Fighting Tommy*と第一次世界大戦の記憶」。『東北英文学研究』第3号。日本英文学会東北支部、2013a。11-22。
- 。「〈第一次世界大戦世代〉不在の時代に——Carol Ann Duffy, ‘Last Post’ と傷の記憶／記憶の傷」。『英文学研究』第90巻。日本英文学会、2013b。1-17。
- 武田ちあき。「サッチャーのお化け——ヨークシャー学校小説シリーズによみがえる英国の幻」。『憑依する英語圏テキスト——亡霊・血・まぼろし』第8章。福田敬子・上野直子・松井優子・編。東京：音羽書房鶴見書店、2018。183-204。
- 中島文雄。『英語の常識』、増補改訂版。東京：研究社、1953。
- マクロン、キャスリーン。「クロスカルチャー処世術36 南は南、北は北——ローカル・アイデンティティー」。『英国ニュースダイジェスト』。ロンドン：英国ニュースダイジェスト社、1996年2月29日、18。
- ミス・リード。『ドリー先生の歳月』。中村妙子・訳。東京：日向房、1999。
- 。『エミリー先生』。中村妙子・訳。東京：日向房、1998。
- 。『ミセス・プリングル』。中村妙子・訳。東京：日向房、1999。
- 山口裕貴。「サッチャリズム教育政策とその背景——政治経済的条件からの概観的考察——」。『桜美林論考 自然科学・総合科学研究』第5号、2014。125-138。

“Britain loses some Cockshotts, but gains Wangs.” *The Japan Times* 27 March 2009.

“History—Yorkshire Party.” Yorkshire Party. 20 May 2018

<<http://www.yorkshireparty.org.uk/history/>>

“London may ban fast-food ads on public transport.” *The Japan Times* 19 May 2018: 7.

“Obesity in the United Kingdom.” *Wikipedia*. Wikimedia Foundation, Inc. 11 May 2018

<https://en.wikipedia.org/wiki/Obesity_in_the_United_Kingdom>.

(2018年9月11日提出)

(2018年11月16日受理)

Sweeping the School:

The Symbolism of Caretakers in Village School Novels

TAKEDA, Chiaki

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This paper investigates how characters of caretakers in village school novels symbolize British cultural, social and educational values amid the conflicts of tradition and reform in the political climate from WWII through Thatcherism to Brexit. Among abundant varieties of unique characters produced in their several long series of village school novels by Miss Read, Gervase Phinn and Jack Sheffield, school caretakers cut singularly similar figures, clearly an iconographic stereotype. Especially female caretakers, with their huge bodies and bold manners, displaying dedication to work and defiance toward authority, definitely evoke the images of a woman warrior, a guard and gatekeeper, and furthermore, working-class Britannia. Her battlefield is a school, her enemy is trespassers into her area, and her combat is a national myth for the British reader. Far from being a mere picture of nostalgia, the cameo of this dynamic, energetic lady with vitality functions as a powerful source of political encouragement for those yearning for preservation (or revival) of Englishness in education and society, that is, individualism and regionalism against threatening factors like the National Curriculum and the European Union. This goddess sweeps the school, gaining big popularity—and she sweeps the school, clearing away any obstacle to good, old traditional English values.

Keywords: caretakers, school novels, social classes, Thatcherism, regionalism